

Fresh公演

居残りの会始動!

演劇好きが集まった

5月10日(水)18時40分、授業終了後、B棟メモリアルホールで演劇愛好会「居残りの会」の旗揚げ・新生活歓迎公演がおこなわれた。脚本と演出はマス・コミュニケーション学科2年生の坂田直斗さんが担当。2年生13人による約1時間の公演で、「殴られ屋」と「LIFE」の2部作品を披露した。(撮影:添田一真 取材:文 小川茜)

静寂な舞台は柔らかな照明に包まれ、演技が際立つ。演者の緊張感と、この目を待ち焦がれていた観客の期待感が合わさり、張り詰めた空間となった。「殴られ屋」は、殴られ

屋を営む2人の男と、客である2人の女との間で繰り広げられる恋愛コメディだ。新しく彼女が欲しい。真っ赤なグローブを付け、殴られ屋・室伏亮平(写真

2部の「LIFE」では寿命が売買され、貧富の差が広がる世界の中で、主人公・橋雅斗(江口雅教さん、同

心は恋のボクサー」。恋に燃える男の真剣な眼差しからこぼれた台詞に笑い声が響いた。また、小松麻友猪原侑子さん、マスコミ学科2年)が力一杯に室伏を殴ると、反動で身体がよじれるという名演技には会場から驚きの声があがった。グローブは演目のためにわざわざ購入した。その目論見は的中した。

終演後のインタビューで「3か月前から練習をしてきたし、人間学総合基礎演習Ⅰ・Ⅱで授業の一環として組織した劇団『エド蔵



室伏を殴る小松(中)



反動で身体がよじれる室伏(右)



姉弟の和解前(右、中)



和解し、その後の橋の様子(左)

学科2年)が自分の寿命を売るところから始まる。寿命を売ったことでの雅斗とその姉・渚(鈴木貴江さん、同学科2年)との迫真の姉弟喧嘩場面では、観客の顔が様に険しくなるのを感じられた。途中、アタッシュケースが開かず緊迫した雰囲気になったが、アドリブを交えて乗り切った。舞台の幕は、寿命を売った本当の理由を姉に明かし、和解した雅斗の晴れやかな表情で下ろされた。

出し』の跡継ぎ公演ということでプレッシャーがありました。一安心というか終わってホッとしました」と部長の江口さんは笑顔で答える。劇のスタイルはジャンルに拘らず、自分たちのやりたいことはすべて挑戦して経験を積んでいくつもりだ。だが、まだ跡継ぎ公演を成功させたにすぎない。あらたな劇団は、「これからがスタート」なのだという。

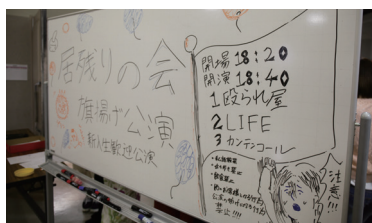


部長の江口さん

そもそも居残りの会とは…

「居残りの会」旗揚げのきっかけは、「人間学総合基礎演習Ⅰ・Ⅱ」が今年から演劇公演は行わず台本制作に注力するようになったこと。そこで講義を通して演劇の楽しさを知った一部の学生が集結した。演者だけでなく、照明や美術、音響もすべて学生が担当する。現在は2年15人、1年12人の計27人が所属する。活動日は月曜日から金曜日の17時から20時。メモ

リアルホールが練習場所だ。「先輩方がかっこよかったです」とはにかんだ1年生の初舞台を含めて、次回の公演は7月中頃を予定している。



終演後のカーテンコール